



巫女バイトの

帰りの電車で

イケメン集団に

足腰たたなくされるまで

そのまま

イカされて

マーキング

されちゃう話

目次

一章◇満員電車で囲まれて	1
二章◇多目的トイレにて	36
三章◇再びの悪夢	68
四章◇監禁調教	95
五章◇終わりの始まり	131
あとがき	141

一章◆満員電車で囲まれて

バイトが終わったのは、もう夜の七時だった。

（わぁん、この時間混んでるのよね）

さすがに満員電車で白衣と赤い袴姿で乗り込むのは、あまりにも場違いだ
と思う。でも仕方ない。会場も閉めなきゃいけなかったから、着替える時間す
らなかったのだ。

（うう…… やっぱり目立ってるよね）

やはりというかなんというか、チラチラと視線を感じる。

私はふう、とため息をついた。

きっかけは、商店街と神社コラボの町おこしイベント。大学の友達に「どう

しても」と頼み込まれてお手伝いすることになったのだ。

巫女服を来てティッシュ配りをするだけだと言われていたのに、お客さんに写真を撮られたり話しかけられたり、なんだかとても大変だった。

「ユイ、ほんとかわいい！」

やっぱりユイに頼んで良かったー！

ほら！SNSの反応もめっちゃいいよ！」

「あ！ ちよっとお！ SNSはやめてって言ったのに！」

「ええー！ でもこれ見て来たってひと沢山いたよ」

なんでユイってば、可愛いのにそんな控えめなの？」

「だって、目立つのいやなんだもん」

でもまあ、褒められて悪い気はしない。

来週もよろしく、なんて頼まれてしまったけど、さて、どうしようか。

（この巫女服、なんか心許ないのよね）

見た目こそ立派に巫女服だけど、実際はただのエプロンだ。布がたっぷりあるから気づきにくいけど、サイドから手を入れたらすぐに太ももにたどり着いてしまう。

正直、風が吹くたび下着が見えるのではないかとヒヤヒヤしっぱなしだった。

（でもまあバイト代弾んでもらったし……いっか）

そんなことを考えながら電車で揺られていた時だった。

隣の男の肘が、胸の上にぐっと押し込まれた。

「……っ」

思わぬ衝撃に、一瞬息が詰まる。思わず肩をすくめたところで、それはふっと離れていった。

これほどの混雑だ。揺れに合わせて肘が当たるのも仕方がない。

ちらりと横目で確認すると、相手もただ前を見て黙っているから、きつと気

付いていないのだろう。

（だからこの時間はいやなのよね）

しかし、離れたと思った肘は揺れに合わせて再び胸に触れた。衣越しに柔らかな膨らみを圧されるたび、体が固くなる。それは少しずつ場所を変え、いつの間にかブラジャー越しに胸の尖りを刺激している。

（やだ……変な気分になってきちゃう）

けれど相変わらず隣の男は素知らぬ顔をしているから、「偶然」「仕方がない」と心の中で繰り返した。

——けれどその時。

太腿に、大きな手が触れた。

「……………え……………」

小さく息が漏れる。

腿の横を、布越しになぞるような感触。揺れのせいかと思ったがけれど、ま

たすぐに同じ場所をなぞられる。

心臓が跳ねた。

誰の手か分からない。振り返ろうとしても後ろは人の壁で、顔すら見えない。ただ、明らかに意図を持った動きで、太腿をゆっくり、円を描くように撫で廻される。

「やめ……っ」

小さな声で抵抗する。

けれど誰も反応しない。周囲の人々は相変わらず前を向いたまま、無表情に揺れを受けている。その間にも隣の肘は胸に押し当てられる。気付けば偶然なんてありえないほど遠慮のない動きになっていた。

太腿を這いまわる手と胸の尖りを押しつぶす肘。上と下、二つの感触に挟まれて、全身が熱を帯びていく。

（ちよつと……っ　これ、どうしたら……っ）

肘をのけようにもあまりの混雑でどうしていいかわからない。

そうこうしているうちに、再び大きな揺れが走った。

押し合う人波に流され、身体が隣の男の方へ押しやられてしまう。

「……っ」

気づけば、肘の男と斜めに向かい合うような形になっていた。

白衣の胸元が男の胸板に押しつけられる。さっきまで刺激を受けていた胸の尖りが潰されて、おかしな声が出そうになる。

逃れようと身をよじるたびに、余計に擦れて吐息が漏れてしまう。

どうにか距離を取りたいのに、人の壁がそれを許さ。前も横も、ぎゅうぎゅうに詰まった身体が行く手を塞いでいた。

その瞬間――。

男の手が、無理やり私の身体の間に入り込んできた。

「や……っ」

そのまま、ぎゅうつと胸のふくらみを驚づかみにされる。

「ちょ……っ やめて下さ……っ」

小さな声で抗議するものの、周囲の人々は誰一人こちらを見ない。

男の指先は、突起を探すように、布越しにカリ、カリと擦ってきた。

（それ……っ やっ……）

敏感な部分に熱が走る。漏れそうになる吐息を何とか抑える。

「いい加減に……っ……」

言いかけた声が、唇の端で途切れた。

間違はなく私の胸を弄んでいるはずの目の前の男は、素知らぬ顔で前を向き、吊り革を握っている。まるで自分の手はそこにないかのように。けれど驚いたのはそこではなかった。

（え……！？ まさか、この人が……？）

痴漢なんて、オジサンがするものだと思ってた。

なのに目の前の素知らぬ顔の男は——そんな想像とはかけ離れている。

シンプルなTシャツ。けれどその下にたくましい筋肉が隠れているのがわかる。短髪にキリつとした顔立ちは、さわやかなスポーツマンと言った風情。

（な、なんで、こんな人が……？）

もしかして、触られていると思っているのが勘違いなんじゃないかと戸惑ってしまうほどの、好青年。

予想外のことに一瞬頭が混乱している間に、太腿を這いまわる手が、いつの間にか巫女服の中に入り込んでいた。

「……っ！」

腿の内側をひんやりとした手で撫でられ、全身が強張る。

誰の手か分らない。後ろは人の壁で、振り返ることもできなかった。

（だれ……っ、だれなの……!!）

問いかけは胸の奥で凍りつき、唇からは漏れなかった。

指先は腿をなぞり、ゆつくりと上へと進む。

逃れようと足を寄せても、手は関係なく強引に上へと上がってくる。

「やめ……」

何とか振り向こうとしたところで、ふわりと微かに甘い香水の匂いが鼻をかすめた。耳もとに、低く響く声が落ちる。

「その格好、コスプレ？ それとも本物の巫女さん？」

甘さを含んだ声に、ぞわり、と耳が震えあがる。

コスプレ？ 違う、いや違うないけど……！ 否定しようと口を開いたけれど、どうしてか、言葉にならない。

「ふふ、コスプレかな？ こんなエッチな袴着て。——触られに来たの？」

「ち、ちが……っ」

「違うの？」

「あっ……っ！」

そのまま、指が下着の上をなぞった。

「——っ!!」

「反応、可愛い。——濡れてるね」

（やだっ……そんなはず……っ!!）

背後の男が、濡れた下着を確かめるように、下着越しに閉じた割れ目を往復する。

「ほら、わかる？ 濡れてるの」

濡れた蜜を下着にこすりつけるように、くちやくちやと指がうごめく。

おかしい感覚。けれどジワジワとお腹の奥から何かが沸き上がってくる。

アソコの入り口がキモチイイなんて、知らなかった。

「あ、あ、あ……っ」

「気持ちいいんだ？ ココはどう？」

「ひゃんっ!!」

男の指が、私の敏感な突起を探り当てた。

「あは、当たりだ」

コリコリコリコリ

下着の上から、指の先で弾くみたいにしつこく往復される。

（あぁっ それ、だめっ……っ）

嫌なのに、気持ちいい。何とか息を殺そうと、目をつぶって下を見る。

——瞬間、前の男が、着物の合わせから無理やり手をねじ込んだ。

「あっ！」

下半身の快感を逃すのに精いっぱい、気付いたときには遅かった。

そのままブラジャーの隙間から侵入してきた手に、胸の突起をきゅっと摘ままれる。

「ひいっ…… やめ……っ！」

けれど抵抗の言葉は意味をなさない。何事もないかのような顔で、まるで粘

土遊びをするみたいに乳首をこねくり回される。

「あっ…… ふっ……っ」

上と下。

二つの感触が同時に襲いかかって、体はどうしようもなく粟立ってしまう。

（や、やだやだ……っ こんな……っ）

恥ずかしさと気持ち良さで喉がひくつく。呼吸が浅く早くなり、視界が揺れた。

「……いいね君、ほんと可愛い」

背後から落とされる短い囁きに全身が震える。褒められたのか、からかわれたのか分からない。ただ頬に熱がのぼって心臓が跳ねる。

「きゃあんっ!？」

正面の男が乳首を強くつねり上げた。

いつか間にか、私のことを見下ろしている。その射貫くような瞳には、後ろ

の男に対する明らかな苛立ちと、ドス黒い熱が浮かんでいた。

「っ痛いっ……っ」

乱暴につねられ続けて。思わず小さな悲鳴が漏れる。

「女の子には優しくしなきゃ、ねえ？」

様子を察した後ろの男が耳元で囁く。優しくしなきゃ、と言いながら、今度は後ろの男が、クリトリスを下着越しにつねり上げた。

「あっ……やあっ……」

びくんっと身体が跳ねる。

「ちっ」

今度は前の男が片方の手で乳首をつねり上げながら、もう片方を布越しに強く揉みしだく。

「あ、ああっ……やだっ…… やだあっ……」

前からは乱暴に胸を揉みしだかれ、後ろからは下着越しに敏感な場所を執

拗に弾かれる。

痛かったはずの刺激はいつのまにか快感に変わっている。漏れる吐息が抑えられない。無理矢理与えられる二つの強烈な快感に挟まれ、いよいよ足の力が抜けそうになった。

もう立っていられない。頭がおかしくなりそう。

助けて、誰か――。

限界に達した私が、前後の男から逃れるように、ふらりと斜め前へ顔を逸らしたその時だった。

ふと、一人の男と視線が絡んだ。端正な顔立ちに、上質なスーツの生地。きつと、住む世界が違う人。こんな状況でなければきつと恥ずかしくて目も合わせられなかっただろうけれど、そんなことを言っている場合じゃない。

（たすけて……っ）

涙で滲んだ瞳で、懇願を込めて訴えた。胸は前の男の手に揉まれ、後ろの指

は下着の内側を搔き乱している。この悪夢から逃れるには、涼しい顔で吊り革を握る彼に縋るしかない。

——一瞬、男は目を瞬かせた。驚いたように私を見返す。その瞳にわずかな逡巡を感じ、胸に希望が灯る。

そして男は、すぐるように伸ばしかけた私の手首をがしつと掴んだ。

「あっ……」

ぐいっと強い力で引き寄せられる。前の筋肉質な男と、後ろの男の隙間からすり抜けるようにして、私はスーツの男の胸に飛び込んでいた。

柔らかい生地感触。ふわりと香る清潔な匂い。

（あ……たすかつ、た……？）

ようやく深く息を吸い込み、呼吸を整える。安心で、ふっと身体の力が抜けた。

——けれど次の瞬間。

続きは本編でお楽しみください。次ページからは続きのダイジェスト版をどうぞ

ダイジエスト

「三人で仲良くシェアしようよ。ほら、君もその方が気持ちいいでしょ？」

金髪の男が甘く囁きながら、私の白衣の胸元、その合わせ目を留めている紐に指をかけた。

「だめっ……！ あけちゃ……！」

必死に首を振って抵抗するけれど、両腕は拘束されていて防ぐことができない。金髪の器用な指先が、するりと紐を解く。それと同時に、背後の短髪の男が私の腰をぐんと反らせた。胸が否応なしに前へと突き出される。

「……っ！」

その無防備になった胸元を、正面のスーツの男が、空いた手で左右に大きく開いた。バサリ、と音を立てて、白衣が剥ろげられる。

「ひっ……あっ……！」

冷たい車内の空気が、汗ばんだ肌に直接触れた。周囲に人が密集している満員電車の中で。私は三人の男の壁に隠されるようにして、ブラジャーに包まれただけの無防備な胸を、完全に晒してしまっていた。

「へえ、明るいところで見るともつと可愛いね」

蛍光灯の白い光の下。金髪の男が私の顔を覗き込んで、にっこりと微笑んだ。斜め前に立ったスーツの男が面白そうな声で告げると同時に、赤い袴の腰紐が躊躇いなく引き解かれた。

「あっ……やめっ……!!」

エプロン型の袴は、バサリ、と音を立ててあっけなく床に落ちる。続いて、蜜で重くなった下着ごと、金髪の男の指が容赦なくはぎ取った。蛍光灯の容

赦ない光の下で、丸出しの下半身が三人の男たちの前に晒される。

つう……と、秘所から蜜があふれ出した。

（中略）

ちゆるっ。太ももを伝ってあふれ出た蜜のしずくを、金髪の男の舌が舐めとった。そのままひくつくあそこに熱い吐息がかかる。

「あ、ああっ……だめっ、汚いっ、やめえっ！」

見上げると、スーツの男がベルトを引き抜き、スラックスのファスナーを下ろしている。

「え……？ うそ、やつ、やめて……っ！」

逃げようにも後ろへ下がることも、腰を振ることもできない。完全に股を開

いて固定された私の目の前で、スーツの男が、凶悪に熱を持った自身の猛りを私の秘裂にあてがった。

「や、やめて……お願い……っ」

恐怖で涙があふれ出す。

「はっ 初めて、なの……ゆるし……」

カチャ、カチャツ……。

冷たい金属音が響き、私の両手首が、背中の後ろへ無理やり回されて固定された。

「やだっ　なにをするの……っ！」

抵抗する間もなく、今度は両膝を大きく曲げさせられ、太ももがお腹につくほど深く折り曲げられる。その状態で、私の脚は無惨にM字に開かれ、太ももとふくらはぎがベルトでがっちり固定されてしまう。

「これ、着けてあげるね。俺たちがいなくても寂しくないように」

エプロンを外した悠が楽しそうに笑いながら、私の前の秘裂に、ベルト式の凶悪なパイプをぴったりと押し当てて固定した。

「だめっ、やだあつ……はずしてっ!!」

「全員いなくなるんだ。外すわけないだろ」

「逃がないからっ 逃がないから、これ、やめてっ」

慧が口元に薄い笑みを浮かべ、手元のスマートフォンを操作した。

——グイグイインッ！

「あゝっ！？ ああああっ！！」

突然、股間に押し当てられたバイブがけたたましい音を立てて振動し、私の身体がベッドの上でビチビチと跳ねた。手足がM字のまま固定されているせいで、逃げることもできず、ベッドの上を無様にゴロリと転がってしまう。

「俺たちのスマホと連動してる。……いいか？」

慧が屈み込み、転がって涙目になっている私の頬を、愛おしそうにゆつくりと撫でた。

「離れていても、ずっと俺たちのことだけ考えてろ。帰る頃には、中も外もトロトロにして、いい子で待ってるんだぞ」

ガチャリ。

甘く、けれど絶対的な支配を含んだ声とともに重厚な扉が閉まる音が響き、
広すぎる高級マンションに、私一人だけが取り残された。